

観光教育フォーラム2021

～教育界と産業界で育む小中高生の「豊かに生きる力」～

2021年03月13日

【パネルディスカッション】

- コーディネーター : 宍戸 学氏 (日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授)
パネリスト : 寺本 潔氏 (玉川大学教育学部教育学科教授)
村上 和夫氏 (立教大学名誉教授)
森下 晶美氏 (東洋大学国際観光学部国際観光学科教授)
中野 憲氏 (株式会社JTB教育事業ソリューションセンターセンター長)
江藤 誠晃氏 (株式会社BUZZPORT代表取締役)

音源ファイル: 210313_シンポジウム_パネルディスカッション.mp4

○事務局

それでは、ここからは観光教育の協議会委員でもございますし、分科会の統括座長を務めていただいた宍戸先生に進行をお任せしたいと思います。

先ほどの事例紹介と同様に、途中ご質問がありましたらQ&Aに聴講者の方々は入れていただければ、時間の都合付く限りこのパネルディスカッションの中でも拾わせていただきたいと思います。

それでは、宍戸先生はじめ皆様方どうぞよろしくお願いいたします。

○宍戸 (日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授)

皆さんこんにちは。これから、非常に限られた時間ですけれども、これからの観光教育ということをテーマにパネルディスカッションを進めさせていただきます。

本日、コーディネーターを司ります宍戸と申します。日本大学国際関係学部の所属です。

私自身は、先ほどご紹介ありましたとおり、この協議会の委員、それから統括座長、3つの分科会があったのですが、その中の専門学科の座長も務めました。

私自身、大学の学部と大学院で観光研究等をしてきまして、その後、高等学校、現在は大学で観光を教え、研究する立場にあります。観光教育を専門分野としておりますけれども、昔から考えると観光教育というキーワード自体があまり知られていなかったもので、このように非常に話題になったということで大変嬉しく思っているところでございます。

さて、早速ですが、時間も限られておりますので、これから入っていきます。パネリストの方の

紹介はこれからのご発言の中でお願いしたいと思っております。

まず、本日の議論のテーマ、問題意識を簡単に申し上げたいと思います。すでに観光庁のご説明や3方のご発言からありましたとおり、3つの事例報告を見るだけでも観光教育の目的や扱う内容、また、その学びで得られる学習の効果は非常に幅広いといえます。たとえば、私どもの研究者の中では、観光を教えること、学ぶこと、これは観光の発展を支える教育であって、一般的に研究視点では「観光教育」とそちらを名付けています。他方で、小学校、中学校などではそれが意識されることが多いと思うのですが、観光で教える、学ぶ、つまり、観光を教育の手段として教育効果があるということを念頭に教育を推進することがあって、これを「教育観光」と我々は名付けているわけですが、当然様々な観光教育、教育観光は目的や役割が異なります。一方では明確に両者を区別するものでもないですし、すべき必要もないという考え方もあります。

つまり、非常に多様であるが故に、何が観光教育なのかということから議論が始まり、また、具体的にどのようなカリキュラム、すでにご質問があったとおり実際にそれをどのようにマネジメントしていくのか。また、教員はどのように養成されるのか。教育方法はどうするのか。または、高校以上であれば専門学科などでは進路はどうか。実はそれぞれの立場で議論のポイントが非常にたくさんあります。

今年度は、観光庁さんの協議会や分科会では、このような多様な観光教育の実践、この3つにとどまらず、観光立国に伴って様々な実践が各地域や学校、もちろん産業界でも試みられていると思います。これをこの協議会では明らかにしていくとともに、可能であればそれらの連携を深めていく。また、願わくば非常に多様な観光教育の体系を皆で考えていきながら、観光教育の推進が図れたらいいのではないかと考えております。

これまでの協議会や分科会の議論は非常に多岐にわたるものですので、この議論を少しでも皆様と共有する意味で本日は5名のパネリスト、協議会のメンバーからそれぞれの立場で観光教育についてお話をいただきながら議論を進めていきたいと思っております。

私自身は、高校の専門学科の観光教育の座長を務めました。今回発言ができないので一言だけ申し上げますと、先ほど鈴鹿先生からご紹介があったとおり、新しい学習指導要領において商業分野では観光ビジネスが2022年に始まります。これは非常に画期的な出来事です。ただ、これは商業科だけの問題ではなくて、実は農業や福祉、水産、工業、他の専門教育も観光教育にアプローチを試みています。我々は、そういった多分野の専門学科との連携も必要であるということの認識に今回、至ったところもござります。このように、それぞれの立場から考えれば非常に幅広くなっていきますが、少しでもそれを皆様と共有できないかと考えております。

それではパネリスト、順を追ってご発言をいただきたいと思っております。まず初めに玉川大学の寺本先生、ご発言をお願いしたいと思います。

○寺本（玉川大学教育学部教育学科教授）

皆さんこんにちは。玉川大学教育学部で11年目になります。寺本潔と申します。専門は社会科教育学、生活科教育学、総合学習論をずっと実践的に展開してきました。観光教育に関しましては、沖縄県、北海道、高知県などに出向いて、小中高等学校で実践的な出前授業を繰り返しながら、そ

の土地に住んでいる児童生徒にとって観光という事象がどういった意味を持っているのかを一緒に考えるということを行ってまいりました。

観光教育の課題は、教育界における観光教育の優先順位とございますか、現在では観光教育は、今宍戸先生もお話になったように小中学校レベルでは認知が進んでおりません。ですから、その認知を上げて、優先順位を上げていく努力をしないと、ほとんど無視されていると言いますか、観光教育への間違った観光のイメージ、要するに娯楽、遊びの教育というふうに使われているということでございます。それをいかに払拭して、多様な学力が身に付いていくように、どのように展開するかというのがポイントかと思えます。

課題感を明示してくれということですので、ちょっと書いてきました。見てください。

まず1つは、いろいろな産業に元気を与えるビタミンとしての観光というもののイメージを作っていく必要があるかと思えます。観光振興のためだけの教育ではないのだということ、いろいろな産業に元気を与えるのだという認識を、教育界にもたらさないと一歩も進まないのではないかと思います。

2番目に、目線です。他者目線に立った多角的な思考がこの教育でできるのだということを改めて感じておりますので、そういった面で興味を持ってほしいなと思えます。

3番目は、SDGs資質につながるような、そういった観光教育をこれから推進していく必要があるのではないかと考えています。とりわけ、責任ある観光です。今までの「旅の恥はかき捨て」なんていう日本人を、これからは作ってははいけません。まさに責任ある観光、自ら観光する人、あるいは受け入れる人も持続性を考えて、責任ある観光をどのように考えていくか、そして楽しんでいくという、そんな時代に来ているのではないかなと思えますので、こういった論議が今日のシンポジウムやワークショップでできればなど期待しております。以上です。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

寺本先生ありがとうございました。非常にたくさんのご実践をされている先生ならではのご発言でございました。小中学校においてはやはり、観光教育というよりも、むしろ教育の中で観光をいかに活用するかという部分。一方で、その役割は非常に多様ですし、効果があるので、これをいかに進めていくかという、その普及の課題意識などもご提案いただいたのではないかと考えております。ありがとうございました。

それでは続きまして、村上先生よろしくお願いたします。

○村上（立教大学名誉教授）

村上でございます。私は大変珍しい大学の出身で、立教大学社会学部観光学科というところの卒業生です。観光学科ができて4回生ですので、昭和40年代ですけれども、先ほどお話があったようにごく限られた人しか観光教育を受けていませんでした。それからずっと観光の業界にいて、そして観光事業論という科目を教え続けて、最後の頃になりましたら人々が楽しみをどうやって旅の中から作り上げていくのかというような研究をしていました。さらに、定年の直前に私がいた立教学院に中学校、高等学校が2校あり、そのうちの1校の校長を拝命いたしまして、それなら観光教育を

そこでやろうということで、文科省からプロジェクトの認定を受け、観光教育を実践しました。

そういうわけで、高等教育と中等教育で観光の教育をやってきたという人間でございます。

私は今一番、課題感として、観光教育の中のテーマ、特に小中高の中のテーマは、日本の教育は受験もあったせいなのではないでしょうか、競争すること、あるいは労働中心主義的であることが教育の要になっていたりすることがあります。これは部活でもそうです。部活で全国1位になると、すごいと皆が思う。しかし、本当にそうなのではないでしょうか？ 生徒たちに聞いてみると、生徒たちの「部活をやってよかった」というのは「仲間ができた」ということなのです。私も実は高等学校のとき寮生活をしていて、その寮生活の仲間が今でもずっと続いています。私のいた寮には同級生が24人いましたが、今でも24人のうち亡くなった者を除けば毎年集まっています。全く欠けることがない。そういうことを考えると、部活は実は勝つことではなくて、どういう暮らしをその人たちと共有するかということなのです。ですから、中等教育において重要なのは、自分たちの人間関係をさらに社会に広げて、社会との関係の中での自分の生活を考えていく機会、それに観光が大きく役立つということです。

一緒に旅をすること、たとえば修学旅行に行くこと、あるいは何か悪いことをするかもしれません。でも、そういうときに重要なのは、その旅をした経験、そして、それが自分に与えたショック、そういうものを人々は感じるのです。それを一生持ち続けます。研究だと年を取るほどそれは高い価値を持つようになってきます。

しかし、実際に中等教育の先生方はものすごく忙しい。先ほどの事例のようなことができる先生は実は大変少ないのです。ですので、私はもっと社会との関係の中で、企業や社会の活動をしている人たちが中等教育の中に加わっていただいて、観光教育をすることを提案したいと思っています。それは同時にSDGsであり、さらに教員のアクションリサーチにつながると考えています。よろしくをお願いします。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

村上先生ありがとうございました。非常に現代的な課題を解決する意味でも、人生とか生き方にも関わっていく観光教育、古い言葉でいうと「かわいい子には旅をさせよ」ということとイコールではないかもしれませんが、旅が持つものは歴史的にも証明されていると思いますけれど、改めて問い直されたような感じが私自身はしました。

それでは続きまして、森下先生よろしくお願いたします。

○森下（東洋大学国際観光学部国際観光学科教授）

東洋大学国際観光学部の森下と申します。どうぞよろしくお願いたします。自己紹介ということもないのですが、私自身、専門は観光マーケティング、商品企画というようなことをやっていますが、実はもともと旅行会社の出身であり、その後大学の教員になり、大学の教員の途中で観光庁に出向したりということで、実は“一人産官学”をやってきた人間です。なので、いろいろな立場からものを見させていただく機会を得まして、そこで感じたのは、産にいるときには官と学がダメだなと思ひ、学にいるときは産と官がダメだなと思ひ、官にいるときにはその2つがダメなん

だなど、それぞれそんなふうに思っていました。

早速ですが、課題感というようなことですが、観光の教育は本当に多様であるために整理がし切れていないので、よけいわかりづらくなっているようなことがあるかなと思います。大きく分けると、観光を提供する側としての教育。ここで言うと、たとえば地域とか事業者という立場としての教育ということと、観光を享受する側の旅行者側の教育、この2つがあると思います。冒頭に宍戸先生が観光教育と教育観光というふうにおっしゃったように、まさしくその2つは全然違うと思います。効果にしても、提供する側は観光を社会との関わりで見えていますし、享受する側は自己との関わり、自分との関わりで見ているというようなこともあるので、どちらかというと先ほど村上先生がおっしゃったような自己の成長みたいなものも、教育観光、要するに旅行者としてどうあるべきなのかという、そういうところが必要になってくると思います。

要するに、提供する側としては、今日は本当に先生方いろいろ事例をご紹介いただいて、地域経済だとかSDGsだとか郷土愛だとかというような、社会との関わりの部分であって、非常にわかりやすい部分だから、これは何となく受け入れられるような気がします。一方で享受する側の旅行者としての教育は、たとえば異文化理解であるとか、自己変革とか自己成長、それから海外旅行においてはグローバル化というようなことが出てくると思うのですが、ここは逆にわかりづらい部分なので、なかなか社会に受け入れられないというようなところがあります。私も以前から、「旅育」といって子どもたちに旅はどういう効果があるのかみたいなことをやってきて、教育委員会とかの先生方にお話しすると必ず壁にぶち当たるのは、旅行は行ける人と行けない人がいるので、行けない人がいるようなものは全体の教育としてやりづらいのだということを、ずっと言われてきています。なので、やはりこの辺が問題なのかなと思っています。

実際に、旅育のことなんかをやっていると、海外に行った子どもさんとかがふだんの生活との比較において、たとえばハワイに行って「何でこんなに飲み物がでっかいんだ？」とか「どうして泳いでいても砂が自分の水着に入らないんだ？」とかいう、そういう小さなところから気づいていく。この辺はアンケート結果からも出てきているところがあるので、効果というのは割と言えるかなと思います。それから、知らない他者とかコトとかモノと出会う本当に恰好な機会でもありますし、初めてのチャンスだったりすることもありますので、そういう意味では享受する側の教育効果も高いと思うのですが、その辺が非常にジレンマかなと思います。つまり、わかりづらいので、行けない人がいるので、というようなところがやはり壁かなと思います。

なので、政策としても少しその辺を支援していただきたい。行ける人を増やすというようなこともあるかなと思います。よく、行ける人というと必ず補助金狙いのような話になるのですが、そうではなくて、たとえば行く人にミッションを与えて、たとえばインバウンドのこれからのマーケティングにつながるように日本を宣伝する、というようなものを与えつつ、少しサポートしていただくようなもの。

それから、実際に行ける人に関しては、こういうことをやってくると自己成長につながるよというような、ポイント集みたいなものや事例を出していくと、もう少し広がってくるかなと思います。村上先生が労働中心主義とおっしゃっていたように、そっちではない側面というのがあると思いますので、そこをもう少し整理してやっていくといいのではないかなと思っています。以上です。

○**宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）**

森下先生ありがとうございました。非常にたくさんの情報量がありますので簡単にまとめることは難しいと思うのですが、観光教育の捉え方というのは、たとえば旅育、先生は大変長くやられておりますが、その効果は非常に幅広くございます。一方で、平等性みたいなところはどうしても学校現場では求められますので、この辺の課題感というものもご提示いただいたように思います。

それでは続きまして、産業界からということになりますが、中野様お願いいたします。

○**中野（株式会社JTB教育事業ソリューションセンターセンター長）**

JTB中野です。よろしくお願いいたします。JTBと教育といえば、普通の方は修学旅行をまずはイメージされると思うのですが、私どもは旅行の範疇にとらわれずに、いかに教育的効果の高い企画や商品を提供できるかということについて日々、研究開発を行なうというような仕事をしております。

現在の教育界の大きなトレンドの1つに、いろいろな方が触れてらっしゃいましたけれども新学習指導要領の動きというのがありますけれども、この中で探究学習、探究活動というのが非常に大きなトレンドだと考えております。このトレンドは従来の学力、偏差値追求型とは全く違った方向性を持っていることは周知の事実かなというような状況となっているということです。

そういう中で、探究という切り口から考えると、現状はいわゆる黎明期のような時期だと感じておりまして、多くの学校と先生方が探究のスムーズな取り組み方を様々研究されていらっしゃいます。その際に観光教育というのが、とてもこの探究という概念に対して親和性が高く、かつ幅広く受け入れられやすいテーマだと感じております。釈迦に説法という感じになりますけれども、探究はメソッドと同時にプラクティスも非常に大事ですので、私どもの立場としては優良で、汎用性の高いプロダクトの開発に専念していきたいというふうに思っております。

それがどんなプログラムかということ、画面共有させていただきます。今、画面共有させていただいているのが我々のプロダクトの代表的な1つでございます。昨年からご提供させていただいている「未来探究ゼミナール」という名称のプロダクトでございます。様々な地域の観光データ、その分析をベースにして地域振興のアイデアを、中学生、高校生の皆様が探究していくという形のSTEAM学習×PBLプロジェクト教材プロダクトというようなものになります。

ほんの少しではございましたが、こんな仕事をしておりますということで、ご紹介をさせていただきました。ありがとうございます。

○**宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）**

中野様ありがとうございました。産業界、特に旅行会社と従来から言われているところで考えると、修学旅行の企画をして学校とのつながりがある、それもひとつの観光教育の機会だと思うのですが、近年では新しい学習カリキュラムの中に、学び方の変化もございますので、PBLであったり地域学習、探究、様々な変化がありますが、そういったところに産業界側のノウハウだとかネッ

トワークを使って提供していただい。これは後に出てくると思うのですが、学校現場も社会とどうつながるかというところは弱いので、こういったところに産業界との連携の重要性があるように感じました。

それでは続きまして、江藤様よろしく申し上げます。

○江藤（株式会社BUZZPORT代表取締役）

よろしくお願いいたします。江藤でございます。私も民間からこの委員会に入らせていただいております。観光業界のプロデューサーでございます。世界各地、日本各地の観光プロジェクトに具体的に携わってまいりまして、きょうは1つの事例として私がプロデュースをしております観光甲子園のお話を簡単にご説明して、探究型学習というものを皆様と共有させていただきたいと思ひます。パワーポイントのほうをご覧ください。

観光甲子園。探究型学習プログラムとして、産官学連携のプロジェクトとして12年の歴史を持っておりますが、一昨年から私がトータルプロデュースをさせていただくということで、抜本的に改変をしまして2年目でございます。

こういったパンフレットをご覧になった先生方もおられるかと思ひますが、全国5,000校の大学にまずは校長先生宛てに春にDMを送らせていただきまして、ここにごひますようにまさに産官学様々なパートナーにご協力をいただきまして、特に先ほどお話をいただきましたJTB中野様ともご一緒しております。具体的な高校生にとっての活躍の場を作ろうというようなプロジェクトをやっております。

このプロジェクトの課題感は、まずは探究活動の場を作るといふことで、まさに主体的・対話的に深い学びという教育指導要領に沿った、高校生を主体に何ができるかという場作りを探求しております。

そしてもう1つが、機会の格差の是正といふことで、あらゆる学校、あらゆる地域の高校生たちが挑戦できる場を作ろうといふことでプログラムを再編しました。

具体的な流れとしては、まず地域の課題を発見し、それを皆さんで学び、動画を作る。180秒の動画という共通の出口を作りまして、それをコンテスト形式で全国で争うといふプログラムにしております。部門は、訪日観光、ハワイ部門、日本遺産といふことで、インバウンド、イントラバウンド、アウトバウンドすべての部門に関して自由にエントリーできるように作っております。具体的な入賞作品、グランプリ作品等は、ちょうど2月7日がグランプリ発表でございましたので、ぜひWebサイトをご覧くださいと思ひます。

着目いただきたいのが、エントリー数が今年劇的に増えました。43都道府県から726チームのエントリー、そして、残念ながら探究型といふことで取材、動画が作れないといふことで、4分の1が離脱にはなりましたが、最終的には552チームが、倍率でいいますと訪日が70倍になります。その他の部門も15倍といふ中で、勝ち抜いたチームの決勝大会が繰り広げられました。

今後及び今年の方策として考えておりますのが、SDGs思考の獲得と探究学習を科学するといふ要素でございます。

SDGs思考に関しましては、私がMDGs時代からこの分野に関しての調査研究をしておりますの

で、この17の目標と169のターゲット、これを構造的にウェディングケーキモデルでまとめたストックホルムの研究所の理論を入れまして、先生方にウェビナー等でこの3層構造で経済、社会、環境を考える、このプログラムをオンライン教育をさせていただきまして、実際生徒の方々には動画のプログラムをこういったレシピで3層構造のSDGsで体系的に動画を作るというプログラムを作りました。今回、552枚の未来レシピを私どもで扱いました。

もう1つが探究学習を科学するというアプローチです。こちらJT様とご一緒しておりますが、「AiGROW」という生徒の潜在的な性格コンピテンシー評価のAIプログラムを入れまして、生徒1人1人の因子を分析するプログラムを入れしました。この中でこういったコンピテンシー、いろいろな課題を解決する力でありますとか、13のテーマでそれぞれの生徒さんがこういった因子を持っているかということ进行分析させていただきました。わかりやすく歴史上の人物に例えることができますが、今回、圧倒的に傾聴力や共感力が高い聖徳太子タイプが多かったというようなことであります。こういった分析を通じまして、1人1人の高校生の因子をしっかりと分析しながら、優勝チームをどのような人たちが集まって作ったかというようなことを解析しております。

こういったことも含めて、今後はできるだけ具体的な行動特性を高めるためにはこういったコンテストを行なうか、あるいは、結果として優勝したチームはこういったコンピテンシーがあったかということ科学的に解析していこうと考えています。

「機上の学び」と「地上の学び」と私は言っておりますが、ぜひこういった2つの要素でオンとオフの学習に橋をかけていくということをご提案していきたいと考えております。以上でございます。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

江藤様ありがとうございました。観光甲子園については私も初期のころ、グループ発表という地域発表するところから関わっておりますけれど、非常に大きく発展してきました。江藤様の取り組みも含めて、学校の中のカリキュラムの外にこういった学びの場が広がっていく。これも非常に大きく観光教育が普及していくひとつのきっかけではないかと考えているところでございます。

ということで、実は2分ずつお話をさせていただくということでありながら、やはり先生方も熱が入り、時間が超過していますので少し延びる危険性が高くなってまいりましたが、これから議論に入りたいと思います。たくさんテーマがありますが、3つほどに絞って簡単にご発言いただく形になっていきたいと思っております。

まず、観光教育の難しさは多様性にあるということでございます。この多様性ということについて、今後の手立て、もしくはお考え方をお聞きしていきたいと思っております。寺本先生、普及のことも考えていると思うのですが、多様性、たとえば小中学校もしくは先生のご研究などから、どのように考えていくべきか、ご発言いただければと思っております。

○寺本（玉川大学教育学部教育学科教授）

学校種による多様性がまず1つ考えられます。小学校、中学校、高等学校、高校の専門課程、それぞれの狙いがありますし、発達段階の違いというのがかなり大きくなります。小中学校は比較的

学区というものを明確に持っていますので、地域社会と密接につながっていますので、保護者との関係性も考えながら進めていく必要があります。また、道徳的、徳育も重視しております。従来、ふるさと教育、ふるさと学習というのを大事にしていたのですけれども、ふるさとだけに特化して、内向的というか、視野が狭くなる危険性もあります。ふるさとの偉人とか教えとか祭りとか、愛着、誇りを持たせることは大事なのですが、もっと多様に、やはり人を呼び込む、そして、ふるさとを磨いていく、交流人口を増やしていく。そういう方策を考えるにはどうしたらいいか。やはり切り札は観光なのです。そういった意味で、SDGs、地方創生とか結びついておりますけれども、そういった多様性を促していくというのは、外とつながっていくということがすごく大事になってきます。

もう1つの多様性で、様々なセクターが観光産業界あるいは観光振興に関わる必要があります。ちらっと考えてみたら、学校というものを取り巻いてこのように旅館やホテル業、それからDMOとか教育委員会。このDMOさんと教育委員会がタッグを組んで人材育成を推進するという姿がほとんど見られないのです。みんな縦割りで動いておりますので。何とかDMOと教育委員会を結び付けたいなと思っています。きょう視聴されている方で教育委員会の関係者が何人いらっしゃるか。非常に疑わしいかなと思います。

それから、各産業界です。農林水産とか商工業、様々な交通系も関わります。それを支援するのが観光産業界の核となる日本観光振興協会、旅行業協会、観光庁そのものもまさにその核となるかと思っておりますので、こういった多様なセクターが支援しながら、次世代育成、特に中核人材育成にはいろいろな事業費が付いておりますけれども、もうちょっと下の、観光を支える基礎人材育成に関心を持っていただきたいと思っています。そうしないと観光先進国とまではいかないのではないかなと思います。

観光教育は、先ほど象徴的に森下先生が旅行に行ける家庭環境の人と行けない環境の人がいるんだよということで、これも昔から言われてきました。ですから観光題材を教育界にコンテンツとして入れるのに大きな制約となっておりましたけれども、よくよく考えてみると、いろいろな条件で将来旅行に行けない子どもたち、これが本当に将来とも旅行に行けないのだろうか？ 現在は行けない家庭環境にあっても、様々な障害を乗り越えて、将来は行けるかもしれないのです。ですから、やはり将来のことを考えるのが教育ですから、将来生きて働く力を。だから、一生旅行にも行けない人がいるから観光を考えさせることはダメだとか、それで切り捨てるのではなくて、やはり将来行けるのではないかな。オンライン旅行なんかは視聴できる能力があれば、家にいたってできるわけです。つまり、旅行とか観光といったものが人間形成にいかに重要な役割を果たすのか、そして、いろいろな交流しながら人生を楽しみながら生きていく。そういった役割です。結局は社会の中で観光あるいは観光産業が認知されて、重要だと認めていただくことが一番重要でございます。

様々な学校種の多様性、セクターの多様性、総力を挙げて進めていく必要があるかなと思っています。以上です。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

本当にいろいろな角度からご発言いただき、ありがとうございました。参考になりました。

それでは、時間も限られておりますので、なるべくまとめてご発言、この後お願いしたいと思いますが、中野様いかがでしょうか。

○中野株式会社JTB教育事業ソリューションセンターセンター長)

JTB中野でございます。弊社も観光業の真ん中のビジネスドメインということとさせていただきますけれども、皆様よくご存じのように巨大な産業で、すそ野が膨大だなということを感じております。なので、現在すでに多様なモデルが観光業の中には存在しているということです。

そういう前提に基づいて観光教育と多様性というものを考えると、そもそも観光教育という言葉自体、今までも議論されたように新しい言葉であるし、大きい言葉なのです。概念が大きくて、アプローチも非常に多様、逆に言うと多様過ぎる状態になっていると思います。たとえば、ガイドさんとか接客業とか売り子さん体験をするようなボランティアな部分から、そうではなくてもっとアカデミズム系な、たとえば地域振興を考えるみたいなことまで、本当に幅が広いと思います。

要は、ちょっと逆説的になるのですが、この多様過ぎるアプローチがある状況というのを、我々の立場としてやらなきゃいけないのは、もう少し整理整頓して、観光教育のセグメントの体系化みたいなものを整理していくことが必要なのではないかなと思っております。以上です。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

ありがとうございました。それでは森下先生、この多様性についてご発言いただきたいと思いません。

○森下（東洋大学国際観光学部国際観光学科教授）

ありがとうございます。たぶん中野さんと話がかぶっちゃうのかなと思うのですが、観光は、観光という名前が付いたとたんにイメージするものがサービスとかおもてなしとか楽しいとかというところに限られてしまうという世間的なイメージがある一方で、我々が今やっているのは逆にものすごく多様性があるというようなことが言われていて、この辺で相反しているような部分がすごくあると思います。

なので、多様性というものを、端的に言ってしまえば観光の効果とか本質的なものをいかに世間に知ってもらって、それを理解していただくことが必要なのかということだと思っております。多様性という言葉は逆に安易に使わないほうがいいかなと思います。観光の場合は、プレイヤーとか効果とか段階とか立場とか、本当に様々な多様性があるので、多様性という言葉が付けたとたんにそれで一つに括られてしまう危険性があるので、中野さんおっしゃったように1つ1つを、何が効果があって、どういう課題があるのかというのを丁寧に整理をしていく。これがやはり必要かなと思います。ありがとうございます。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

ありがとうございました。かなり重要なご指摘ではないかと思っております。まだまだこの多様な部分についての議論も必要だと思うのですが、時間の関係がありますので、次のテーマに

移りたいと思います。

先ほど江藤様からご発言があった観光甲子園をはじめ、学びの機会をどう作るか。観光ビジネスに教科が入っていく場合には、授業の組立てであったりとか、学科コースがある所はいいのですが、そうでない所にいかに学びの機会を作るか。もしくは興味ある先生がどんなふうにチャレンジしようかというところで、なかなか科目を作るとか、先ほど質問があったように学校長や学校内の理解が得られないことも多々あると思います。学びの機会の創出についてということでお伺いしたいのですが、江藤さんも実践されておりますので、その関わりでも構いませんけれども、どのようにお考えでしょうか？

○江藤（株式会社BUZZPORT代表取締役）

学びの機会を作るのも多様性といいますか、多様なチャンネルのシナジーだと思っています。先ほど寺本先生がおっしゃったDMOと教育委員会の連携ですけれど、実は今回、観光甲子園、一番多かったのは東京都、次は神奈川、そして3番目が兵庫県でした。兵庫県のDMOと連携のプログラムを作って、実は私が兵庫県教育委員会もすべて行きまして、すべての学校に声をかけていただくという地道なことをやりました。その結果、兵庫県は3倍くらい応募が増えました。おそらく機会があること自体をしっかり伝える上で、DMOの役割、教育委員会は大きいなど。そして、ポイントは、高校生たちはDMOや観光協会に皆さん取材に行っているのです。これが観光協会の面白いところです。場合によっては高校に呼ばれての授業にDMOが来られて、私の講義と一緒に学んだりということもありました。

そういう意味では、多様な人たちが集まって課題を考える機会を作ることは、様々な可能性と方法はあると考えております。

○穴戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

ありがとうございます。これは専門学科でも出た議論なのですが、子どもたちが動くことによって逆に地域とかいろいろな関係者が集約されていくという不思議な力があります、子どもたちの活動には。

村上先生その辺いかがでしょうか、学びの機会を創出するというところで考えたとき。長い観光教育の経験があると思いますが。

○村上（立教大学名誉教授）

私は普通科の高校の分科会だったのですが、実は国語という科目は非常に観光に大きな影響を持っているのですが、あまりこの手の議論には登場しません。ですが、どうやって国語を巻き込むのかということはずいぶん前に考えたことがありました。それを考えるときの重要なことは、先ほど江藤様のお話にもありましたが、メディアを使う、あるいはデジタル化するということを観光教育の機会の中に取り込むということです。これは決して高等学校の情報科に観光教育を渡すということではありません。実際、世の中で観光の情報がどう飛び交っていて、それを誰が、どのようにリードしているかということの研究すると、わかってくることは、ほんの少し前まではパブリック

メディアだったのです。テレビを見て新しい観光地やいい旅館があるなど、それから、新しい旅のしかたがあるなんていうのがあって、今から30年くらい前に「小さな旅」というNHKの番組が少しリベラルな活動をしたりしました。

ですが今、旅を実際にリードして、それを多様化しているのはどこにあるかということ、デジタル化したインターネット社会のプラットフォームの上に皆さんが上げた動画をほかの人が見ることによって生じるということなのです。決して中央集権的にこれが動かされ、整理されることではないのです。なので、実際にマーケティングの世界ではインフルエンサーが商品を動かしていくような、そういう社会があったりします。

ですが、教育のほうで気をつけないといけないのは、デジタル社会は危険だと教えるのです。もちろん危険もある、だけれどもデジタル社会がどういうふうに動いていくのか、そのところで観光がどう関わっているかということを中心にきちんとしてやるのが大事です。現実の観光地を見ると、デジタル化していく、言ってみればCX、DXに進んでいくときに、結果としてリアルな新しいコミュニティが生まれていくという構造が動いているのです。その一部がDMOになったときにそれが成功するような形になっているのです。実際にデジタル化する、たとえばインターネットの上にある話はどうなっているかということ、必ず物語になっているのです。物語はリアリティを伝える。なので、先ほどの中野さんのお話にあったコンテストにたくさんの人が応募してくるという、そういう構造です。物語が出て、ストーリーがあって、コトになっていると、そこに関係できるのが国語だったり美術だったりするということ、そういうことなのです。

なので、多様性というのを整理するときには、方法と対象をよく分けて、デジタル社会を怖がらないようにしてやるのが大切だろうと思っています。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

ありがとうございました。デジタルの話もそうですし、国語とか、観光者の移動とかモノとしての構造は考えているけど、観光者の気持ち、観光心理という言い方は昔からされていますけれども、もっと現実的な個人個人の気持ちを考えてみるということは実は根本的なマーケティングの重要性、ストーリーという話もありますけれども、非常にご示唆ありました。

実はもう1つテーマが残っているのですが、時間を過ぎてきております。大変申し訳ございませんが、事務局からは半に区切っているけれども、こういった場ですので少し延びてもいいということもあったので、ここで最後にもう一言ずつご発言いただくのですが、質問が上がってきております。もし質問があればこの場で上げていただきたいと思います。事務局のほうで共有される形でよろしいでしょうか。

○事務局

それでは、今届いている質問についてパワーポイントに落としましたので、そちらを共有させていただきます。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

失礼しました。ありがとうございます。3つほど挙がっておりますね。

「コロナ禍で観光教育のあり方も変化しています。地域に学生を出しづらくなっている。こういうときに、どのような方向性で行なっていくべきか」。これは学校現場の問題もあるかと思いますが、森下先生、大学なんかでは今、難しいところがあると思うのですけれども、いかがですか。高校ではないと思うのですが、コロナ禍の中で学生の活動のしづらさだとか、不謹慎であるということを実は私も若干言われているような気がするのですけれども、こういった部分ですね、どういう方向性で行っていくか。コロナ禍なのか、ウィズコロナか、アフターコロナも含めて、簡単にコメントいただけますでしょうか。

○森下（東洋大学国際観光学部国際観光学科教授）

ありがとうございます。活動自体は現実リアルにやるということは難しいので、オンラインを上手に使って、きょういろいろな事例をご紹介いただいたと思うのですけれども、まさしくあんな感じだと思います。不謹慎かどうかというようなことですが、観光そのものの効果が広く世間に認知されていないというところが大元の原因だと思うのです。コロナ禍真っ最中の部分と、今後どういうふうになっていくのか、どうしていくのかという中長期的なところがあるかと思うので、中長期的なところで日本にとって、もしくは旅行者本人にとって観光がいかに効果があるのかというところを、きちんと入れていけばご理解をいただける部分だと思うのですね。

学生もそのような感じですね。入ってきて観光を選んでどうしたらいいのかな、みたいなのがあったのですけれど。観光は中長期的に見ると非常に成長していく部分だし、日本にとっても世の中にとってもこういうふうにご貢献ができるのだということもきちんと入れてあげると、逆にやる気になったりしている部分がありますので、きちんと効果なりを入れていくということが必要かと思えます。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

ありがとうございます。すみません、超過していますが続けさせていただきます。

先ほど、貧困とか旅行に行けない人があるということで、これは森下先生からもご提示いただいたのですが、中野さんは旅行会社で、修学旅行なんかでもこの問題は出てくると思うのですけれども、どうですか。お立場的にご説明が可能であれば中野様からお伺いしたいと思ったのですが。

○中野（株式会社JTB教育事業ソリューションセンターセンター長）

はい。少し議論が一緒くたになっている印象があって、旅行に行けない人の話と観光教育に取り組む話がなぜ一緒になるのかが、ごめんなさい私はわかりません。旅行にばんばん行けるセグメントの人が観光教育をすべきかみたいな話では、全くないと思うのですよ。そもそも教育の一環としての観光教育でありますので、旅行会社の私が言うのは非常に難しいのですけれども、言いたことはそこです。旅行に行ける行けないと観光教育を一緒にしないほうがよろしいかと存じます。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

ありがとうございました。村上先生、先ほど打ち合わせレベルの話ですけれども、地域間みたいなことも出ていたと思います。身近なところで観光から学ぶケース、先ほどの成蹊小学校の先生の事例なんかがそうだったと思うのですが、村上先生この辺のお考えいかがでしょうか。

○村上（立教大学名誉教授）

今の中野様のお話、そのとおりだと思うのですが、一方で、かつて私が取り組んだケースで、立教は観光学部というのがあって、その隣にコミュニティ福祉学部という、社会のそういう問題を扱う学部があって、一緒に取り組んだ例があって、車椅子で遊びに行くというのを一緒に取り組んだ。そうすると、健常者の人から見ると車椅子の人たちがなぜ坂を転がり落ちるのを喜ぶのかというのがわからないのです。一緒にやってみると、車椅子の上から落ちる喜びというのがあるのです。そういうようなものをお互いに共有していくと「なるほど。あそこの坂でまた遊ぼうぜ」というふうになったり、一緒に街歩きをして、そこにトマソンを見つけるとトマソンを見つける面白さみたいなものがまた共有されてくる。これはある種、教育の中の技術革新をもう少ししなければいけないのではないかと。私は中野様のお話に全く賛成です。そのこととは別に、どういう旅行が作れるかということからスタートするというほうがいいのではないかと気がしています。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

ありがとうございました。それでは、次ですが、次年度観光計画を検討していきます。予算とか、先ほどのマネジメント難しいので、たとえば1日でも取り組める事例、またはそういう考え方です。これはぜひ寺本先生、簡単なご示唆をいただけますでしょうか。予算もない、時間もない、1日くらいで観光を学ぶ事例はあるでしょうかということだと思っております。

○寺本（玉川大学教育学部教育学科教授）

1日で取り組める事例ですか。私の専門は地理学ですから、まさに日帰り巡見、エクスカージョンです。これが一番、すぐ近くでの小さな観光旅行でもあります。こういったエクスカージョンの手法を取り入れていくと、指導者である先生方も、エクスカージョンのプログラム開発とか教育効果に目覚めていただけるかなと思っています。先日も、コロナ下ではございましたけれども、大田区の町工場見学、街歩き、やってまいりました。工場観光ですね。距離を取りながら観察する。対面でインタビューは避ける。こういった工夫をしながら、十分できます。修学旅行も今ストップしていますけれども、工夫すれば実現できる可能性が高いのではないかと思います。ですから、1日あるいは数泊の旅行を再開する可能性を模索する必要があるかなと思っています。以上です。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

ありがとうございました。ここにまだ載ってないのですが、最後に飛び込んできた中で私がなかなか面白いと思ったのが、「多様な観光教育が整理されたときに文系・理系の縦割りに収まってしまわないほうがいいのではないかと」ということで、実は先ほどの森下先生の問題の多様性とも関わってくるのですけれども、どうしても学校のカリキュラムだと文系・理系だとか観光ビジネスの授

業とか、そういった意味のわかりやすさがある一方で、そういう枠組みをあまり意識しない、実際観光は文系・理系両方必要だと私も思います。江藤さんどうですか、外でいろいろ勉強していく中で、社会人を相手にされていますし、文系・理系とか学校の学習と観光の学びみたいなものをあえて取っ払ってしまう、枠組みを当てはめないということだと思うのですが、何かご発言いただけますか。

○江藤（株式会社BUZZPORT代表取締役）

具体的な結果でいいますと、観光甲子園ハワイ部門SDGs×探究だったのですけれど、グランプリを取った学校にこの間インタビューに行きました。2人コンビで、1人が文系、1人は理系の友達同士がエントリーしました。つまり、彼らの中でそのボーダーは越えていると思います。面白いのは片方は論理派で、片方は芸術派ということです。おそらく日頃の学びを共有し合うような関係を作ることができる。

それからもう1つが、私のほうのプロデューサー育成で、大学生の観光を学んでいる人たちのインカレ組織を兵庫県のDMOで作っておりまして、36人のアシスタントプロデューサーを育てているのですが、彼らに観光甲子園を見せたところ、これまた学部はすべてばらばらです。文学部、社会学部、経済、商学、国際、総合政策、いろいろなメンバーが集まっていますが、彼らが観光について自分たちで夜な夜な対話をするようなオンラインミーティングを自発的にやっております、さらに高校生に自分たちの思いを伝えるような授業をやりたいと言い出しております。そういう意味では、1日でもできるというか、1時間でもできる教育を、場合によっては高校生でいうと先輩たちが海外を旅した経験を出張講義をするようなものは、おそらく予算もなくとも取り入れていただけるようなことができるのではないかと考えております。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

どうもありがとうございました。

すでに時間のほうも10分ほど経過しております。最後にお1方ずつおまとめいただく予定なのですが、時間が心配でございますが、大変恐縮ですが30秒くらいで、最後にこれだけは言っておきたいということをお願いしたいと思います。順不同になりますが、中野様からお願いできますか。

○中野（株式会社JTB教育事業ソリューションセンターセンター長）

中野でございます。30秒ですね。いろいろな議論が短い時間の中で活性化非常にした議論だったと思います。私が一言言いたいのは、たくさんの方が言ってらっしゃいましたけれども、楽しく学べる環境ですとかワクワクできるみたいなキーワードがたくさん出てきたのですけれども、観光教育をこれから広めていくに当たっては、楽しく学べる、ワクワクできるというベースを押さえてやっていきたいなと感じました。以上でございます。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

ありがとうございました。続きまして寺本先生お願いいたします。

○寺本（玉川大学教育学部教育学科教授）

私は、これを来年度やるべきだと思っています。観光庁が提案する学習パッケージです。授業支援パッケージ。学習指導案、多様な教科ですよ、社会科だけではなくて。それから、授業映像。授業の映像です。それから、動画コンテンツ。ワークシートや各種資料。この4つを推進していくと、もうすこし教育界で認知が進み、市民権が得られる可能性が生まれてくるかなと思っています。以上です。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

ありがとうございました。それでは続きまして、江藤様お願いします。

○江藤（株式会社BUZZPORT代表取締役）

先ほど私の発表の中で、「機上の学び」と「地上の学び」というキーワードを出したいのですが、機上は「机の上」ではなく、機械の「機」つまりデバイスの上でオンラインで学ぶということです。これがどういう形で今後、学びの場を旅の世界に拡張していくかという、空間の考え方。それからもう1つは、高大連携、中高連携のような、生徒たち、子どもたちの自分の時間の連携軸として、観光を学ぶことを時間的に拡張しながら大人になれるか。こういった場作り、制度作り、アイデア作りが必要と考えております。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

ありがとうございました。それでは続きまして、村上先生お願いいたします。

○村上（立教大学名誉教授）

私は、デジタルな空間の中に観光を学ぶという機会があって、生徒たちが時間を関係なくアプローチできるというような、そういうものがあって、それに紐付いた形のリアルな人の動き、あるいは組織の動きが出来ればよいなと思っています。終わりです。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

最後になりますが、この協議会の座長でもありました森下先生、何かございますでしょうか。

○森下（東洋大学国際観光学部国際観光学科教授）

ありがとうございます。今日のを全部伺ってきて、観光教育と観光の効果は、ほぼニアリーイコールなのかなと思うところがございました。それを教える先生方がいかに重要かということも、広告を打つてとかいう話ではなくて、教育の中できちんと効果を教えていただくことがいかに重要かというのが本当にわかったというようなところがございます。そうなってくるとやっぱり、先生方非常に忙しくて、なかなか観光のことまで考えるのが大変だと思いますので、きょう観光庁さんこういうことをやってらっしゃいますけれども、外部のほうからまとめているいろいろなトピックを提供

して差し上げるべきだなと、改めて感じた次第です。ありがとうございます。

○宍戸（日本大学国際関係学部国際総合政策学科教授）

ありがとうございました。限られた時間の中で、私の取りまとめも上手くいってないところもあって恐縮でございますが、いろいろな議論が出てきて、今後、皆様方、ご参加いただいた方々もいろいろなヒントがいただけたのではないかと思います。時間が超過してはしまいましたけれども、その分いろいろな議論になったかと思えます。

最後に私として、今日はあまり発言をする立場ではいなかったのですが、いくつかいろいろなことがございます。まとめということも簡単にできませんが、2つだけ感じたところがございます。

それぞれの取り組みは大変すばらしいと思えますし、実際に教育を議論すると観光に限らず、何でもやってみたほうがいいのです。ただ一方で、ひとつもムダはないし、間違いはないのですけれども、しかしやはり進むべき道や方向性はきっとあるはずで、もちろん教育に回り道だとか失敗はあっていいと思うのですけれども、それぞれが思うところをやるだけではなくて、今回いろいろな方々が関わって議論が始まったということに非常に価値があって、進むべき方向をお互いに協力しながら進めていくことが大事であるというふうに考えました。

また、最後に森下先生もおっしゃっていたのですが、先生方が忙しい一方で、先ほど鈴鹿先生の発表にもあったのですが、先生たちは生徒たちのわくわく感とか成長を信じて教えるというのが、小中高、大学も本来そうなのですが、大きいと思えます。そういった中で先生方が、観光を教えたい、観光は楽しいぞとと思ってください。私も高校現場の経験もあるのですが、先生たちが楽しく、いきいきと教えられるような教科の魅力作りだとか、それをサポートするコンテンツ、またはこういった授業の役割があるのではないかと思います。

なかなかまとまりませんが、今回の議論をきっかけに、それぞれのお立場の方もきょう参加されたと思います。ぜひ、いろいろな機会に、観光庁で来年以降もこの事業が進んでいくと思いますので、これにご参画いただきながら、ご協力、ご支援でネットワークを広げていけたらいいかと思います。

また、午後のワークショップに参加される方は、そこで午前中の議論を踏まえまして、いろいろな考え方を集約しながら意見を戦わせられたらいいと思っています。

ぜひ、本日お集まりの皆様方の力を合わせて、今後、観光教育推進に進んでいくことができれば、本日のこのフォーラムの意義が非常に高かったものではないかと思っております。

つたない進行とまとめで恐縮でございますが、少し時間を過ぎて恐縮ですが、以上でこのパネルディスカッションのまとめとしたいと思います。

先生方、今日は大変貴重なご意見ありがとうございました。また、おつき合いいただきました皆様方、大変ありがとうございました。

事務局に戻したいと思います。

○事務局

コーディネーターの宍戸先生、それからパネリストの先生方、たくさんの意見、それから関連な

意見、大変ありがとうございました。

◆観光教育フォーラム2021